

# 日本基礎教育学会

(The Japanese Association of Fundamental Education)

会報 No.50

令和6年12月25日

一緒に21世紀の日本の教育を考えましょう。

## 令和6年度 日本基礎教育学会月例会

日本基礎教育学会では月例研究会を持ち、先駆的な実践を進めておられる先生方より報告をいただき、基礎教育のあり方について、研鑽を積んできた。今年度の学会の研究テーマは、「子供たちの多様化に対応する基礎教育のあり方」と設定された。特別支援教育を受ける児童生徒や外国人児童生徒等の増加、貧困、いじめの重大事態や不登校児童生徒数の増加等、子供たちの多様化に学校は対応を求められている。さらに、本来であれば家庭や地域でなすべきことが学校に委ねられる範囲が拡大され、その負担増も学校教育の課題となってきた。子どもたちに何が起こり、教育現場をどう支えていくのか、基礎教育のあり方を検討していきたい。

昨年度に引き続き、月例会の発表者を会員より公募し、研究部長を中心に調整を進めた。遠方からの参加者も増えており、月例会は昨年度に引き続き、Zoomで開催とした、月例会の内容は以下の通りである。

### <第1回 月例会>

- 1 日時 10月5日(土) 15時00分～16時30分
- 2 発表内容 『ICT×学級会』思考ツールを用いた話し合い活動の可能性  
- 「意見の見える化」と「視点の焦点化」を通じたマークの原理からの脱却に着目して-
- 3 発表者 明比 宏樹(今治市立伯方小学校)

### <第2回 月例会>

- 1 日時 11月2日(土) 15:00～16:30
- 2 発表内容 ICTの活用に伴う視力低下とその抑制に向けた環境整備と教育方法の検討
- 3 発表者 阪本 美江(芦屋大学)

### <第3回 月例会>

- 1 日時 12月7日(土) 15:00～16:30
- 2 発表内容 男女同権教育は小学生の社会的平等意識を改善するか; 潜在連想テストを用いた検証
- 3 発表者 秋田 真(松本大学)

今年度の月例会の報告を掲載する。今年度、研究大会、月例会を通し、「子供たちの多様化に対応する基礎教育のあり方」について検討してきた。本年度の活動を踏まえ、会員それぞれの研究分野で研究を深め、結果を共有することで、深刻化する子供たちの多様化に、学校の抱える困難さにどう対応していくか、これからの時代を支える基礎教育のあり方を今後とも求め続けていきたい。

### 【日本基礎教育学会紀要論文投稿要領の一部変更について】

紀要投稿数の増加に対応するため、紀要論文投稿要領を一部変更する。学会の研究テーマは、本年度に引き続き、「子供たちの多様化に対応する基礎教育のあり方」とする。

- ・投稿者は、投稿にあたり、次の内容をまとめて、5月10日までに学会指定のサイトに申し込む。

学会指定サイト：<https://x.gd/CqkOW>

- ① 論文タイトル
  - ② 投稿者の氏名
  - ③ 投稿者の氏名(英訳)
  - ④ 投稿者の所属
  - ⑤ 投稿者の連絡先(電話番号)
  - ⑥ 投稿者の連絡先(メールアドレス)
  - ⑦ 要旨(400字程度)
  - ⑧ 研究大会・月例会での発表希望の有無
  - ⑨ 投稿者の会員資格
- ・紀要原稿は随時受け付けるが、編集の都合上、5月10日までに上記の申込みが完了し、6月10日までに、投稿された原稿をその年度に発行する紀要の対象原稿とする。編集委員事務局で書式等を確認し、訂正が完了後、編集委員会が査読を行い、査読完了後、紀要への掲載となる。7月31日までに査読が完了しない論文は紀要に掲載されない。

※上記の学会指定サイトは短縮サイトを利用しているため、使用できない場合があります。その際には、次のサイトを使用してください。

<https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSeZ76OiiLBJAGLDlkatXAoHScrLtKs0ZLLuWHT4P7SMD8vrg/viewform>

## 第1回月例会報告

### 『ICT×学級会』思考ツールを用いた話し合い活動の可能性

- 「意見の見える化」と「視点の焦点化」を通じたマークの原理からの脱却に着目して-

明比 宏樹（今治市立伯方小学校）

#### 【発表概要】

本発表では、出し合った意見を基にして組み合わせたり、よいところを取り入れて新たな考えを生み出したりするなど、児童が創意工夫を生かして合意形成を図ることに重点を置いた学級活動（1）の指導において、タブレット上で思考ツールを用いることを基軸とした話し合い活動の可能性と今後の方向性について提案する。「意見の見える化」と「視点の焦点化」を通じた、マークの原理からの脱却を目指し、深い学びにつながる話し合い活動の可能性を探るべく、タブレット上で思考ツールを用いることを基軸とした実践は、児童が賛成・反対意見を述べていき、マークを貼っていく従来の形態よりも児童の思考過程がより深くなっていくと考えられる。だが、本実践のように、話し合い活動において大型の電子黒板を使用し、タブレット上で思考ツールを用いることを基軸とした実践を継続して行っていく上では、「付箋をどこまで動かすのかという曖昧さ」「マークでなければ、何を決め手に短冊を操作し、意見を絞って合意形成するのかという決定打」「児童のタブレット操作のスキルと時間的・効率的問題」など、解決しなければならない課題が多々あることから、現時点では従来通りの板書を基本とし、部分的かつ必要に応じて、教師の適切な介入のもと思考ツールを取り入れるなど、板書とタブレット端末・電子黒板等のICT活用との融合がベーシックであると言える。

【質疑】（○：参加者の発言 ➡：発表者の回答）

質疑①「マークの原理」について説明してほしい。➡賛成・反対をマークで表示する方法である。分かりわかりやすさもあるが、同じ児童が発表を繰り返すこともあり、マークの数で話し合いが動くのは、課題があると考えます。

質疑②思考ツールを使用するさいの教師の介入の仕方、支援の仕方を教えていただきたい。➡シートの使用については、教師の判断によることが大きい。他教科でも使用しているため、児童には使い方は見当がついている。

【ブレイクアウト】（グループに分かれての意見交換）

1 グループ：「学級会グッズ」による一律の学級会の展開より、思考ツールの活用に参加型の可能性を感じた。全体の話し合いだけでなく、小グループでの話し合にも活用していけるとその良さが生きてくると感じた。

2 グループ：学校現場のICT活用は進められるべき分野であり、学級会でのAIの活用もあるかもしれない。

3 グループ：KJ法等、膨大な資料を関係づけていく手法を小学生に分かりやすい形で実践をされていた。意見を出しやすい仕組みに挑戦されているのは、すばらしいことだと感じた。全体への普及が今後の課題である

【講評 日出間 均副会長】 実践的な研究をされている。話し合い活動の取り組みには、学級によって大きな差があるのが現実である。話し合い活動を全教科の中で取り組んでいくのか、ICTを中心として取り組んでいくのか、学校としての方向性を明確にして取り組んでいく必要もあると感じた。

【講評 小池 幸監査】 「マークの原理」には、視覚化される良さはある。本実践では、理由が分かる良さをICTの活用がカバーしていた。学級会活動でのICTの活用は、時間、スキルの面で遅れている、思考ツールの特長を教師も児童も理解し、話し合い活動に活かしていけるよう、学校全体の研究として取り組んでいけると良い。

【発表者コメント】

学級活動（1）は、自分たちが学級や学校の生活をよりよくするために、問題を発見し、課題を見出し、話し合い、合意形成したことを協働して取り組むとともに、一連の活動を振り返り、次の課題解決へつなげることを通して、自治的能力を育てる上で非常に重要な位置づけである。また、学級会をより充実させ、単なる意見交流会のような表面的な話し合い活動に終始しないよう、適切な場面でICTを活用することは話し合いの質的向上（内容の充実）・児童の思考過程の深まりを担保する上で効果的である。本実践においても、ICTの活用に関して多くの課題が出てきた。参加者の方々に御助言いただいたことをもとに、実践をより精緻化させていきたい。

#### 従来の学級会における課題



- ① 出された意見の具体的内容が見えない。  
→ 話し合うべきポイントが逸脱してしまう。
- ② 賛成・反対の票とり合戦や意見交流会になってしまうケースがある。  
→ 「マークの原理」で合意形成されてしまう。

#### 実際の学級会の様子



【発表概要】

本発表は、近年の子どもの視力低下、すなわち近視の問題について、そのメカニズムと抑制にはどのような対策が必要なのか、明らかにするものである。とくに本発表では、学校教育における今後の課題に着目して検討していくことを目指した。WHOが近視を「世界的流行」と位置づけ、「公衆衛生上の危機」と警鐘を鳴らしている。文部科学省の「学校保健統計調査」においても、同調査がスタートした時期に比べると、明らかに子どもの視力が低下していることが確認できる。とくに近年におけるGIGAスクール構想の実施に伴い、子どもたちのICT機器の利用時間(近業)が増えていることが、視力低下の一因になっている。近視は進行すると、網膜剥離や緑内障等、他の眼疾患を合併する可能性があるといわれることから、看過できない問題であるといえる。近視の抑制に必要なことは、日本眼科医会も指摘するように、ものを見る際十分な明るさを保つこと、近業時間を連続させないこと等、とされているが、学校教育において具体的にどのような対策が必要であるのか、発表者は教育学系の教員のみならず眼科専門の国家資格も有することから、教育学的・医学的な見地から検証した。

学校は単なる学習の場ではなく、児童生徒の居場所であり、心身の健康を保障するという福祉的な役割を担っていることを再認識していく必要がある。とくに良好な視力を保持するには、日常の心掛けが重要になってくる。児童生徒は一日の大半を学校で過ごすことから、教員は、(児童生徒の)健康保持にもより一層留意していく必要がある。発表者はこれまで、学校保健研修会を通じて医師のみならず養護教諭等に眼の健康保持に関する啓発活動をおこなってきた。さらに、奈良女子大学附属小学校をはじめとした複数の学校において、児童生徒に直接眼の健康について伝えてきた。そのような活動を広げていくことで、教員、児童生徒の双方が眼の健康保持を意識的におこない、今後近視を抑制することに繋がっていくと考えている。

【協議】 (○：参加者の発言 ➡：発表者の回答)

○児童生徒1人1台端末の導入により大きく変化している子供たちの学校生活を、現行の「学校環境衛生管理マニュアル」で守りきることができるのだろうか。個人的には、対応の遅れを感じている。

➡しっかりとした知識を教えてもらえないと、子供たちは分からないまま危険な状況に追い込まれていく。近視の大変さを伝え、30cmの距離をとる姿勢の大切さを教えていかなければならない。

○家庭科では、明るさの確保が住まいの学習の学習内容に入っているが、照度計のない学校もある。教科書で内容に触れることで終わってしまっている。実際に計測を経験することは重要なことであると考えている。

➡安価で子供たちにも使いやすい照度計もあり、実際に測定する経験をぜひさせていきたい。

○健康診断の結果、眼科に受信すべき児童が、家庭の経済状況から、受診できないでいる状況があると聞く。経済状況の差を感じられることはないか。

➡2年、3年と通院できない家庭もある。初診料3000円は大きな負担となっているようだ。医療福祉に関わる格差も大きい。受診しやすいシステムを構築していく必要がある。

○教室の机を常にコの字型に配置している学級がある。横から黒板を見続けることは好ましくないのではないか。

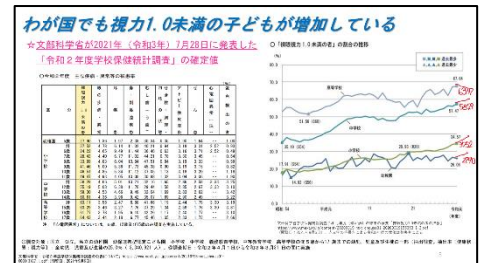
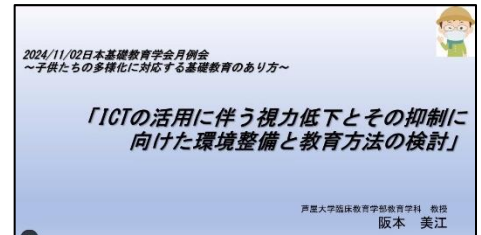
➡斜めから見続けることは、体にもよくない。対話的な学びが必要な場面には机の配置を変えることが望ましい。

【講評 細谷 忠司研究部長】スマホ、タブレットの長時間の使用は、児童の健康に深刻な影響を与えるものであり、阪本先生の児童を対象とした眼の健康に関する授業実践は、学会でも模擬授業として動画配信するなどして、紹介していきたい。さらに、スマホ、タブレットの機能そのものに、照度が確認できたり、使用時間や画面までの距離により警告のアラームが鳴ったりするなど、眼の健康を守るような仕組みを組み込んでいけるとよい。

【発表者コメント】

今、学校のユニバーサルデザイン化を含めた環境整備の必要性が唱えられる中、ご指摘にもあったように、児童生徒の健康保持への対策(そのための環境整備)に関する議論は、まだまだ不十分であるように発表者自身も感じている。近視予防に関しては、家庭科(保健体育)においても学習内容として含まれているようであるが、どこまで実質的な学びに繋がっているのか疑問である。しかしICTの導入は避けて通れないことから(実際、ICT化によるメリットも多々あることから)、今後は、細谷先生もご提案下さったように、ICTが持つ課題を乗り越えて、より効率よく活用がなされる方法を模索していく必要があると考えている。その一助となるよう、発表者自身も可能な限り継続して啓発活動をおこなっていく所存である。

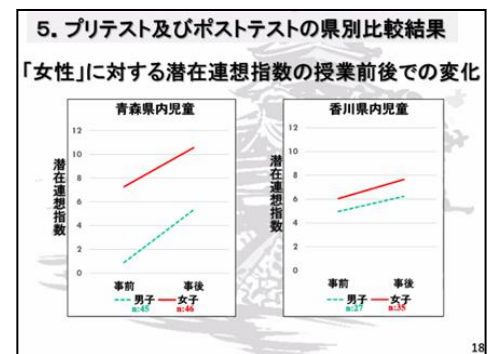
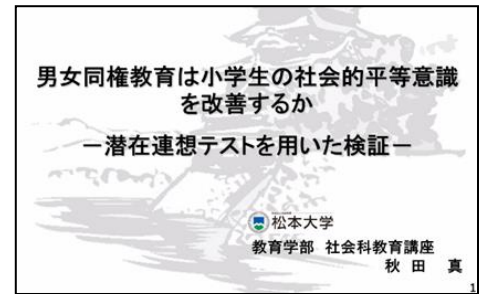
改めて、このような貴重な発表の機会をいただいたことを、心より感謝申し上げたい。



【発表概要】

SDGs「5\_ジェンダー平等」に関連する素材を活用した授業を構想し、青森県内の小学校第4学年生を対象に実施した。その際、授業前後で児童の女性観や性差意識の変化を測定した。その結果、中学年児童でも授業及び測定は実施可能であることが明らかとなった。

嘘のつけない意識測定手法として潜在連想テストがある。IATでは、パソコン画面に提示される単語が「良い意味」か「悪い意味」かを素早く判断し、特定のキーで反応することが求められる。しかし、相当数のPCやソフトの購入が必要である。そこで、IATをPCなしで実施できるよう開発したのが「集団式潜在連想テスト(FUMIEテスト)」である。このFUMIEテストを用いて、児童の女性観を授業実施前後に測定した。結果、小学校の2単位時間内で測定及び授業を完了させることができた。ただし、対象児童数が有意な結果を示す測定数に満たなかったため、FUMIEテストの結果を明確に示すことができなかった。しかし、授業前に職業に対する性差意識についての調査も併せて行ったが、授業後、児童の性差意識が改善されたことが確認できた。



【ブレイクアウト】 (グループに分かれての意見交換)

➡：発表者の回答

1 グループ：授業の成果を分析する研究手法として、「集団式潜在連想テスト(FUMIEテスト)」の活用は、参考となる部分があった。ただし、地域の事情によっては、実施が難しいのではないかと感じた。

➡ジェンダーは、子供の頃からすり込まれてしまっている部分があるのではないかと予想されており、そのためにも、FUMIEテストの授業効果検証の手法としての有効性を検証している。

2 グループ：社会は大きく変化しており、年代により職業観にも違いがある。若い人たちは、ジェンダーに関して差をあまり感じていないのではないだろうか。

➡ジェンダーについて、都道府県による差は大きく、子供たちへの影響も出ている。一方、ジェンダーを取り上げた指導の成果も出ており、今後とも研究を継続させていきたい。

3 グループ：ジェンダーギャップ指数で総合すると日本は世界で118位。教育、健康の面では上位にあるが、政治、経済の面で男女格差は大きく、このあたりのギャップも子供たちの教育に反映させていけると良い。

➡政治分野が大きく立ち遅れている県もあり、未来を担う子どもたちの意識改革を図っていく必要がある。

【講評 増田 吉史会長】

FUMIEテストを活用した研究は、松本大学におられた守一雄先生との共同研究で進められており、興味深い研究であると感じている。本学会を立ち上げられた奥田眞丈氏は、基礎教育学会には、実践者から研究者となった者、研究者から実践者になった者、研究者であり実践者である者、この三者の存在が必要不可欠であると言われていた。本日の発表、協議をみても、会員の幅が広がり、学会としての進歩を感じる。本日、学生が2名参加してくれている。学校現場で楽しく仕事に関わるために、多様な専門性を持つ必要がある。これからも参加を継続してほしい。

【発表者コメント】

先日はご意見を頂き、誠にありがとうございました。現在、Akita, S. & Mori, K. (2024). “An Experimental Assessment of Gender Equality Lessons for Japanese 4th Graders”として、ジャーナルに投稿中です。正式に掲載されましたら、ぜひお読み頂き、ご意見を頂ければ幸いです。どうぞよろしくお願い致します。